

## 医療技術短期大学の動き

## 平成11年度の停年退職教官

京都大学医療技術短期大学部教員停年規程により次の教官（教授2人）が、本年3月31日付で退職の予定である。

氏名	生年月日	講座名等	研究分野等
加茂映子	昭和 11.5.23	一般教育	英国ヴィクトリア朝詩人 G. M. Hopkins 及び米国現代詩人 Adrienne Rich の詩の研究
下野登士男	" 11.11.15	一般教育	小脳神経回路網の発生学的電気生理学的研究，大脳小脳間神経機構及びてんかん発作発現機序の電気生理学的研究

## 日誌 1999.11.1 ~ 11.30

11月2日 ドイツ連邦共和国 フンボルト大学 Hans MEYER 学長他2名来学，総長及び関係教官と懇談  
9日 評議会  
" 大学院審議会  
" 平成11年度京都大学監督者(係長級)研修(12日まで)

12日 連合王国ブリティッシュカウンシル京都事務所代表 Alan George HART 氏来学，総長及び関係教官と懇談  
17日 国際交流委員会  
18日 附属図書館商議会  
30日 評議会

## 訃報

川井 孝夫 名誉教授



本学名誉教授川井孝夫先生は、平成11年11月11日逝去された。享年77。

先生は、昭和24年京都大学理学部物理学科を卒業後、本学助手、助教授を経て同45年教養部

教授に就任，同62年停年により退官され，京都大学名誉教授の称号を受けられた。

先生は、いちはやく非定常（パルス）核磁気共鳴法を物性研究に導入し，高分子物性の動的挙動に関する研究に適用され，無定形高分子の内部運動，放

射線照射による架橋崩壊過程の解明など，優れた業績を挙げられるとともに，同分野における研究において新しい局面をひらかれた。さらに，同様の実験手法を低温領域における低次元磁性体の動的性質の研究にも適用され，非定常核磁気共鳴法による磁性研究の進展に貢献された。

主な著書に『物理学概説』、『電磁気学』、『高分子の構造』（いずれも共著）がある。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

（総合人間学部）

## 香月 裕彦 名誉教授



本学名誉教授香月裕彦先生は、平成11年12月6日逝去された。享年78。

先生は、昭和19年京都帝国大学理学部化学科を卒業、京都大学理学部講師、同助教授を経て、昭和42年同教授に就任し、生物化学講座を担当された。昭和52年から2年間評議員を務められ、本学の管理運営にも貢献された。昭和60年に停年により退官され、京都大学名誉教授の称号を受けられた。

本学退官後は、昭和60年から平成4年まで近畿大学教養部教授を務められた。

先生は、いもち病菌の生理化学的研究から、この

菌の特性を解明され、有機二塩基酸の代謝とその酵素、およびケト酸の分析法の開発などにおいて顕著な業績を挙げられた。さらに、中間代謝の調節機構の生化学および分子生物学、ステロールおよびイソプレノイド生合成の生化学の発展に大いに貢献された。特に、中間代謝において重要な炭酸固定酵素については、その触媒および活性調節機構およびその遺伝子について先駆的な研究を展開された。

これら一連の功績により、平成8年4月勲三等旭日中綬章を受けられた。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

(大学院理学研究科)

## 文化交流

## 「アメリカのインターネット事情」

石黒 浩

1998年4月から1999年2月まで、カリフォルニア大学サンディエゴ校の招聘研究員として、サンディエゴに滞在した。この1年での経験はとて1~2ページでは書き尽くせないが、特に印象が強かったインターネットの利用について述べてみたい。

アメリカで強い印象を受けたのは、生活空間の広さである。日本の田舎町と同じでアメリカでは遠くに出かけないと生活できない。そのため車はどうしても必要である。最初、日本の感覚で車はできるだけ安いものと考えて、1989年製の小型車を\$4,000で買ったが、それで大失敗をした。8カ月ほど経ったある日、ロサンゼルス北にあるオハイという田舎町から帰る途中のハイウェイで突然エンジンが爆発した。その時一番驚いたのは、自分自身の感覚である。車を失うことがこれほどショックだとは思わなかった。車が如何に自分の生活を支えていたかを実感した。

このようなアメリカであるから、情報基盤は必然的に普及する。もともと大抵のことは電話で済むようになっていて、最近ではインターネットがそれに変わ

わろうとしている。画像を映し出したり、確実に件を伝えられるインターネットは電話よりもはるかに便利である。インターネットはしかもカバーする範囲が広く、全米の顧客を相手に商売ができるため、様々なサービスを提供する会社がどんどん出現する。例えば、飛行機のチケットはインターネット以外では買う気がしない。7月に東海岸の大学を訪問する計画を立てようとしていたのであるが、先方との日程調整でなかなか日が決まらなかった。そうしている間に、出発の予定日まで2週間も残らなくなり、大学内のトラベルエージェントに行くと、私の想定する経路では、一番安いチケットでも\$2,000はかかるという。それでインターネットで調べてみると、\$600で、ニューヨーク、ボストン、ロチェスターを渡り歩く切符があることがわかった。しかも出発5日前までなら予約はOKである。切符も予約した2日後に送られてきた。

さらには、テレビのコマーシャルでは、日常的な食料品や衣類もインターネットで注文すると、数時

間以内に届けるというサービスまで宣伝している。またインターネットを使うためのハードも進んでおり、56K のモデムが使えるプロバイダが月 \$8 でアクセス無制限。ケーブルテレビの回線を利用して、自宅のコンピュータをインターネットに直結するサービスは月 \$40 である。

このようなインターネットが作り出す新しい社会は印象深いですが、その反面、アメリカには何か足りないものがあるような気がする。何が足りないかはよくわからないが、とにかく自分たちの文化を創ろうという意識は、日本にいるよりもかなり強く感じられる。そして、そのためかどうか定かではないが、

将来新しい文化の担い手になる子供を非常に大事にする。病院に行くと、このことを実感する。大人と子供の扱いはまるで違うのである。大人に関しては、自己責任を要求する一方、自分の子供に関して、親が少しでも曖昧な返事をする、毎日病院に病状を報告するよう命じられるのである。

このように、アメリカは次世代の文化を担う子供に多くの期待をかけている。この次世代のアメリカが創り出す文化はおそらくはインターネットをはじめとした情報基盤に支えられた国際社会の文化でもあり、それがどんなものになるのか興味深い。

(いしぐろ ひろし 大学院情報学研究科助教授)

## 随想

### 「ハーバード・ビジネススクールにて - シニア・ファカルティ・センター訪問記 - 」

名誉教授 瀬尾 芙巳子

1998年6月、バージニア大学での多目的意志決定に関する国際会議に出席した後、久しぶりにかつて経済学部の研究員として受け入れられて以来、何度か滞在をしたことのある、いわば懐かしい母校と言ってもよいハーバード大学を訪れる機会があった。近代的な意志決定分析の創始者として名声が確立されたビジネス・スクールのハーワード・レイファやジョン・プラットなどの旧知の教授達と、最近の研究動向についてお互いの情報を交換するのが主たる目的である。チームのひとりであるロバート・シュレイファー教授が既に亡くなっているのは残念であったが、後継者のひとりであるアーサー・シュライファー教授とも意思決定分析のコンピュータプログラムの開発から、教育プログラムに関する現状まで幅広い情報を得、また交換することが出来た。空前の豪雨に見舞われ、予定変更を余儀なくされ、僅か3泊4日のケンブリッジ滞在ではあったが、誠に収穫の多い有意義な訪問であった。



その際の研究面の話はここでは措くとして、その周辺の見聞記について若干の印象を述べてみたい。

まず、先に挙げた教授達の中の多くは、すでに70歳で退職または近く退職を予定している Emeritus Professor であるが(制度的な停年は存在しない)、自己や家族の体調にトラブルを抱えながらも第一線で現役の研究や講演活動を続けておられることは当然として、特に興味を惹いたのは、そのような退職後の現役の研究活動を支援する大学の環境条件の整備の在り方であった。例えば、留学時代に師事したロバート・ドーフマン教授は Emeritus ながら、依然として経済学部のあるリッター・センター内に自己の研究室をもっており(一回りスペースは狭くはなっているが)、毎日出勤して学会活動を中心に研究に専念し、また現代的なテーマについて来客と議論を交わされる姿は印象的であった。

特にビジネススクールでは、構内にシニア・ファカルティ・センターという独立の建物を持っている。古い小さな建物を改造したものであるが、Emeritus の教授達はスタック・ルームを自由に使うことが出来る。但し占有はできないので不満もあるようであるが、事実上占有状態にあったケースもあったようである。一階にある広いコモンルームは、来客との応接や打ち合わせに快適な空間を提供して

おり、受付には専任のセクレタリもいて、郵便物などのケアもしている。Eメールアドレスの利用なども現役時代と何ら変わるところはない。ファカルティのための食堂も利用できるので、自己の食事のほかに接待にも使うことが出来る。このように長年の研究の蓄積を有する教授達を退職後もファカルティに準じて処遇し、その社会的な研究活動の継続と展開を支援するやり方は、現時点では、年令差別に敏感なアメリカならではの現象かも知れないが、しかしまた能力主義の一環として考えるならば、個人的な能力を無駄にせず、その社会への還元をもとめて知的資源の最適配分の実現を目指す現代的な合理主義の現れと見ることも出来るであろう。

近頃よく話題に上る大学の大衆化現象は、高度な研究・教育の遂行を可能にする諸大学の社会的役割の重要性を益々高めている。そうした中で一方にお

いては、永年に亘って自己の研究能力の開発に専念し、また教育・研究に実績を積み重ねてきた多くの教授達が、停年後に、自己の能力と蓄積が一挙にスクラップ化される途を辿るとしたら、これほど大きい社会的損失はないように思われる。それこそ社会的・知的資源の悪配分でなくてなんであろうか。高齢化社会の中で、現役の活動年令が高まりつつある一方で、大学の大衆化が避けられない現状であるとするれば、退職後の先生方のさらなる能力の開発と研鑽、社会的な研究活動の継続を支援する環境作りこそが、早急に望まれるのではないであろうか。ハーバード大学の事例はそのよき参考になりうると思われる。文部省の意識改革と共に、大学の自主的な積極的取組みが望まれること切なるものがある。

(せお ふみこ 元経済研究所教授 平成5年退官、専門は意志決定論)

## 資料

### 平成11年度京都大学市民講座講演要旨

本年度の京都大学市民講座は、「かわる」を共通テーマとして、平成11年10月23日及び10月30日の土曜日の午後、2回にわたり法経第4教室、法経第1教室において開講した。

講義科目と講師は次のとおりであった。

複雑系とは何だろう 「変わる」の新しい科学	情報学研究科助教授	稲垣 耕作
生物多様性と共生 組み合わせによる生物の性質の変化	生態学研究センター教授	安部 琢哉
21世紀で価値観は変わる	文学研究科教授	加藤 尚武
「この国のかたち」が変わる 21世紀に向けた中央省庁改革	法学研究科教授	大石 眞

なお、講演要旨を以下に掲載する。

### 複雑系とは何だろう 「変わる」の新しい科学

情報学研究科助教授 稲垣 耕作

京都学派は、昔も今も困難に打ち勝つ不屈の研究者たちによって支えられている。複雑系という分野の成立には本学が大きな貢献を果たした。「決定性カオス現象」の発見者の一人は、本学の上田<sup>うえだ</sup>亮<sup>りやう</sup>教授(電気工学専攻)だった。(上田他著、『複雑系を

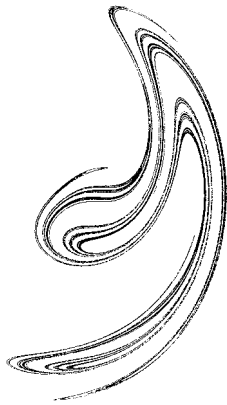
超えて』,筑摩書房,1999年刊)

科学の成立には法則性の発見が必須である。カオス現象の場合は、無秩序のなかの「秩序」を発見した時点をもっとも適当だろう。その記念すべき発見は1961年



11月27日になされた(図)、カオスの発見で言及されることの多いエドワード・ローレンツ(1963年)よりも早く、また19世紀におけるポアンカレもまだカオスに隠された「秩序」をつかんでいなかった。

上田先生のみつけたカオスは、フラクタル、 $1/f$  ゆらぎなどと同じ性質を



世界最初のカオス現象  
「ウエダ・アトラクター」

含んでいる。それは物理現象、生命現象、言語の法則、文明・社会・経済の法則などにつながるもので、複雑系における近年の新しい展開をもたらしている。この科学は「非線形性」を主要なキーワードとしながら、自然界における「自己組織化と進化」を考える科学という側面を強めつつある。

物理学はミクロ、マクロなどの「極端」を探究してきた。残る最大の分野はおそらく「複雑さ」という極端だろう。自然界を物質とともに情報という視点でも探る「情報物理学」に興味もたれる。

(10月23日講演)

## 生物多様性と共生 組み合わせによる生物の性質の変化 -

生態学研究センター教授 安部 琢哉

生物は、突然変異による遺伝情報の変化だけでなく、生物の組み合わせを変えることによってその性質を大きく変える。牛や馬が草や樹木の葉を食べて生きられるのは、草や葉に含まれるセルロースを分解するバクテリアや原生動物がその消化管の中で生活しているからである。

我々の社会と同じく、自然生態系でも大量のゴミが作られる。植物遺体、つまり落葉・落枝である。これらは主にセルロース・リグニンといった難分解性の高分子化合物で出来ている。特にリグニンは天然のプラスチックとも呼びうる超難分解性のものである。

シロアリは、バクテリア・原生動物・菌類など様々な微生物と共生関係をもつことによって、シロアリ単独では持ちえなかった性質、つまりこの植物遺体の食料化に成功した。我々もセルロースの食料化に成功すれば、人類の食糧問題は大きく変化する。

シロアリ2,600種のうち、25%は下等シロアリと

呼ばれ、消化管に原生動物が共生し、シロアリと共生原生動物がセルロース分解酵素を作る。残りの75%は高等シロアリと呼ばれ、共生原生動物を持たず、セルロース分解酵素をシロアリが作る。高等シロアリの中で、植物遺体を最も完全に分解するのが、白色腐食菌のシロアリタケ(シメジと近縁のキノコ)を巣の中で栽培するキノコシロアリである。

キノコシロアリは落葉・落枝をかじり取って巣に持ち帰り、それを食べて消化管を通し、その糞(偽糞)からキノコの培養基を作り、そこにシロアリタケを植えつける。これはリグニンを分解し、シロアリは遊離したセルロースを含む部分を食べる。キノコシロアリは日本にも一種(琉球列島に分布するタイワンシロアリ)が分布する。本講座ではシロアリが様々な微生物と共生することによって生活を変えてきた道筋を紹介した。(10月23日講演)

## 21世紀で価値観は変わるか

文学研究科教授 加藤 尚武

21世紀にむけて世の中の変化の指標がずいぶんたくさん出そろってきた。高齢化時代、環境問題、失業者、情報化時代、国際化時代、世界人口、生命工

学の時代などなど。それぞれ確実な予測の根拠があって、どの指標も当たらずと言えども遠からずだと思われる。

高齢化時代、環境問題、世界人口の問題では、ある程度まで予測が可能である。予測の根拠は、人口の変化の予測に基づいている。どのくらいまで高齢化するか等の見当がつく。それはひとりひとりの人の寿命は予測できなくても、世界全体では予測が可能になるからである。

科学的な真理もいつかはすっかり変わってしまっていて、いまはニュートン力学が正しいと思われているが、将来はどうなるか分からないと言う人もいるが、これは心配しなくていい。科学的な真理がすっかりひっくり返ってしまっていて、昨日の嘘は今日の真理というようにがらりと変わる可能性はない。

価値観がどう変わるか。高齢者を大事にするようになるか。高齢者を邪魔者扱いするようになるか。失業保険は増額されるのか。こういう問題になると、分からないことが多い。しかし、どちらに変わって

欲しいかという期待の方向は打ち出せるかも知れない。世界が平和になるのがいいか、戦争になるのがいいかと聞かれれば、誰だって平和を選ぶ。

21世紀の価値観に関連して、大きな問題として、まず資源問題がある。石油が不足する。食料が不足する。水が不足する。いままではだんだん豊かになるという生活の実感があったが、これからは貧しくなるということに対処しなくてはならない。どうすれば乏しい資源を上手に配分することができるか。

どういふ配分が適正かという問題について、人類がいままで採用してきたのは、「配分でもめ事が起こらないようにするにはパイをおおきくすればいい」という方針だった。21世紀に人類が直面するのは、パイを大きくすることができないときに、どういふ配分をするのが最善であるかという問題である。

(10月30日講演)

## 「この国のかたち」が変わる 21世紀に向けた中央省庁改革

法学研究科教授 大石 眞

先の行政改革会議は、「この国のかたち」を再構築すべきことを説いたが、それは、国民生活の基本的なあり方や国政運営の基本的な原理といったものを意味する。国政の主要機能をつかさどる中央省庁の組織は、日本国憲法や国会法・内閣法・裁判所法・財政法などの憲法附属法で定められているので、その再構築ということになれば、憲法附属法の再検討はもちろん、憲法改正という課題にも取り組む必要が出てくるかも知れない。

憲法制定後数年の間に形づくられた戦後型行政システムは、戦前の「省庁割拠体制」伝統を引き継いだ部分も多く、縦割り行政・セクショナリズムといった弊風を生むとともに、国内外の情勢の変化に対する的確で迅速な対応を妨げてきた面がある。さらに、阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件など、内外を揺るがす出来事が相次いで、国民生活に責任を負うべき政府の危機管理能力に対する懸念も噴出し、次第に制度疲労の色を濃くしてきた。

中央省庁のあり方を見直す動きは、いわゆる第一

臨調の発足から数えても長い歴史をもつ。必ずしも抜本的改革に結び付かなかったが、第三次臨時行革審の最終答申に至る各種の改革論議には、注目すべきものがある。これを踏まえつつ、前記の行革会議は、内閣総理大臣の指導性の確保、内閣機能の充実・強化、行政の総合性の確保を図るための処方箋を示した。これを忠実に制度化しようとしたのが、先の中央省庁等改革基本法であり、内閣法改正・内閣府設置及び国家行政組織法改正等からなる中央省庁改革関連法である。

今回の改革は、部分的手直しにとどまっていた従来の枠組みを大きく超え、政治・行政システムの中核部分に対する正面からの切り込みを意味する。むしろ、その成果は運用次第という面もあろうが、長く不動と思われていた中央省庁が再編されることは確かで、その揺さぶり効果に期待するとともに、時代に適した憲法制度を積極的に構築する必要を確認させたものとして、その意義を肯定的に受け止めたい。

(10月30日講演)

## 話題

## クラブ紹介

## グライダー部

グライダー部は、1952年（昭和27）5月に航空研究会として発足し、翌年11月にグライダー部と改称し現在に至っている。現部員数は18人である。

グライダーというスポーツは、日本ではあまり知られていないが、欧米豪州各国では知名度も高く、生涯スポーツとして人気がある。

グライダーの最大の魅力は、大空を自由自在に舞うことができることにある。行動範囲を地上から空へと広げ、日常とは違った世界を楽しむことができる。また、操縦練習を積んで上達していく中で次々と新しい目標が現れるため、生涯にわたってその楽しさを味わうこともできる。

グライダーの競技は、エンジンのない航空機が用いられる。グライダーはウインチ（トラックの後部にワイヤーを巻き上げる機械がついたもので、ワイヤーの長さは約1 km ある）で空中へと牽引され、パイロットは、約300m～400m上空の上昇温暖気流に乗り継いでいく。競技方法は、離陸したのち、約2 km先の2点を回り、その2点の写真を撮り元に戻って来るもので、飛行高度、距離、あるいはスピードについて審査される。グライダーには動力がつかっていないため、飛行に限界があるが、その限界をどこまで伸ばせるか、自己記録の更新はもちろんのこと、腕を上げれば、日本記録、世界記録も視野に入れることができる魅力あるスポーツである。

これまで出場できる競技大会は、国立七大学総合体育大会が唯一のものであったが、一昨年、日本学生航空連盟に加盟したことにより、10月の東海・関西学生大会（3月の全国大会の予選）、11月の新人戦などの大会に出場できるようになり、活動の範囲も広まった。部員一同がグライダーの楽しみを満喫できるよう、各自の目標に向け、日々、操縦訓練等に努力している。グライダー部のOBには、飛行教官や整備士の資格を取得し、現役学生のクラブ活動を支援している人、社会人のグライダークラブに所属し好成績を収めている人、航空大学校に入学しエアラインのパイロットを目指している人など、大学卒業後もフライトを楽しんでいる人が多く、啓発されることもしばしばである。

大学所有の国有グライダーは、1985年（昭和60）に購入された旧西ドイツ製のアレクサンダー・シュライハー ASK-21型機である。操縦練習は、岐阜県羽島市にある木曾川滑空場において、年4～5回、他大学との1週間の合同合宿で行い、普段は、鴨川近くの近衛地区にあるクラブボックスで、週2回のミーティングを行っている。宇治総合運動場格納庫に格納されているグライダーの機体の整備等も重要な活動の一つになっている。

（注）昨年の東海・関西学生大会では、個人、団体とも4位となり、全国大会に出場することができた。





## 超高層電波研究センター MU レーダー一般公開・親と子の体験学習の報告

超高層電波研究センター信楽 MU 観測所の MU レーダーが完成して、平成11年11月24日で15周年を迎えた。これに先立ち10月31日(日)に「MU レーダー一般公開」が行われた。当日は穏やかな天候で、絶好の公開日であったこともあり、入場者数は前回(平成6

年11月12日)より100人近く増え、433人であった。入場者は、MUレーダーの他、各種観測設備と研究成果の展示、気象観測用気球の放球等を見学した。また次の一般向け講演も計3回行われ、予定時間を大幅に延長して、聴衆から熱心な質問が相次いだ。

「レーダーで地球大気のなぞに迫る」

超高層電波研究センター長 深尾 昌一郎

「宇宙近傍の烈風圏 レーダー・ロケット観測から」

クレムソン大学教授(超高層電波研究センター客員教授) Miguel F. Larsen

また、その1週間前の10月24日(日)には地元信楽中学校の生徒とその保護者30余人を対象とした、「親と子の体験学習」を同観測所において開催した。自らハンダごてを握り、このために特別に設計した「中波ラジオ」を制作し、もの作りの面白さを体験してもらうことが狙いであった。参加者全員は午前10時過ぎから工作を始め、昼食の時間も忘れるほど夢中になっていた。完成後は各自、ラジオ放送を楽しんでいた。多くの中学生にとって、ハンダ付けはほとんど経験がなかったにもかかわらず、工作終了前にはなかなかの腕前になっていた。また、MUレーダーの建設から完成までを紹介した映画や、深尾センター長による講演に続



MU レーダー親と子の体験学習の風景

いて、夕方には各自が小さな紙片に「私の願いごと」を書いて、気象観測装置ラジオゾンデとともにゴム気球に付けて放球し、気球が雲間に消えるまで歓声を挙げていた。(超高層電波研究センター)

## お知らせ

### 京都大学後援会助成事業の募集

本学の教職員及び学生(大学院生を含む)に対し、平成12年度の(財)京都大学後援会助成金第1類第1種(派遣)および第2種(招へい)について、次のとおり募集いたします。

#### 1. 研究者派遣

助成名称	派遣期間	予定者数	助成金額	出発時期	提出期限
1カ月	1カ月	15人	渡航費(往復航空運賃)地域別定額運賃 滞在費:1万円(日額)	平成12年4月1日~平成12年9月30日	平成12年1月31日(月)
				平成12年10月1日~平成13年3月31日	平成12年7月31日(月)
3カ月	3カ月程度	3人	渡航費(往復航空運賃)地域別定額運賃 滞在費:30万円(月額)	平成12年4月1日~平成12年9月30日	平成12年1月31日(月)
				平成12年10月1日~平成13年3月31日	平成12年7月31日(月)
国際共同研究	1カ月以内 (3~5グループ)	10人	渡航費(往復航空運賃)地域別定額運賃 滞在費:1万円(日額)	平成12年4月1日~平成12年9月30日	平成12年1月31日(月)
				平成12年10月1日~平成13年3月31日	平成12年7月31日(月)



## 2. 若手研究者・大学院生派遣

助成名称	派遣期間	予定者数	助成金額	出発時期	提出期限
若手研究者 (長期)	10カ月	満40歳以下の 教官3人	渡航費(往復航空運賃)地域別定額運賃 滞在費:30万円(月額)	平成12年4月1日～平成13年3月31日	平成12年1月31日(月)
フィールド ワーク	1カ月～ 6カ月	満40歳以下の 教官2人 大学院生8人	渡航費(往復航空運賃)地域別定額運賃 滞在費:10万円(月額)	平成12年4月1日～平成12年9月30日	平成12年1月31日(月)
				平成12年10月1日～平成13年3月31日	平成12年7月31日(月)
国際研究 集会等	会議開催期間 (10日を限度)	満40歳以下の 教官13人	渡航費(往復航空運賃)地域別定額運賃 滞在費:1万円(日額)	平成12年4月1日～平成12年9月30日	平成12年1月31日(月)
				平成12年10月1日～平成13年3月31日	平成12年7月31日(月)
	会議開催期間 (10日を限度)	大学院生7人	渡航費(往復航空運賃)地域別定額運賃 滞在費:1万円(日額) 海外旅行傷害保険相当額(1万円)	平成12年4月1日～平成12年9月30日	平成12年1月31日(月)
				平成12年10月1日～平成13年3月31日	平成12年7月31日(月)

## 3. 職員研修派遣

助成名称	派遣期間	予定者数	助成金額	出発時期	提出期限
長期	3カ月～ 6カ月程度	事務系,技術 系の職員(35 歳以下)2人	渡航費(往復航空運賃)地域別定額運賃 滞在費:20万円(月額)但し,必要に 応じて語学研修補助費20万円支給	平成12年4月1日～平成12年9月30日	平成12年1月31日(月)
				平成12年10月1日～平成13年3月31日	平成12年7月31日(月)
短期	2週間程度	事務系,技術 系の職員8人	渡航費(往復航空運賃)地域別定額運賃 滞在費:1万円(日額)	平成12年4月1日～平成12年9月30日	平成12年1月31日(月)
				平成12年10月1日～平成13年3月31日	平成12年7月31日(月)

## 4. 留学派遣(学部学生及び大学院生)

助成名称	派遣期間	予定者数	助成金額	入学時期	提出期限
留学派遣	6カ月以上 1年以内	30人	渡航費(往復航空運賃)地域別定額運賃 海外旅行傷害保険相当額(1万円)	平成12年4月入学または10月入学予定	平成12年2月29日(火)
				平成13年4月入学予定	平成12年10月31日(火)

## 5. 外国人研究者招へい

助成名称	招へい期間	予定者数	助成金額	招へい時期	提出期限
若手研究者	10カ月	申請時に満40歳 以下の者3人	渡航費(往復航空運賃)地域別定額運賃 滞在費:30万円(月額)	平成12年4月1日～平成13年3月31日	平成12年1月31日(月)
一般	1カ月	10人	渡航費(往復航空運賃)地域別定額運賃 滞在費:1万円(日額)	平成12年4月1日～平成12年9月30日	平成12年1月31日(月)
				平成12年10月1日～平成13年3月31日	平成12年7月31日(月)
国際共同研究	原則として 1週間以内	6人 (2-3グループ)	渡航費(往復航空運賃)地域別定額運賃 滞在費:1万円(日額)	平成12年4月1日～平成12年9月30日	平成12年1月31日(月)
				平成12年10月1日～平成13年3月31日	平成12年7月31日(月)

詳細は、各部署担当掛または国際交流課(但し留学派遣については留学生課)までお尋ねください。

国際交流課国際企画掛 電話:075-753-2045

留学生課 電話:075-753-2561

## 再生医科学研究所シンポジウム 「再生医学研究：21世紀への飛躍」

再生医科学研究所では、下記のとおりシンポジウムを開催します。

### 記

日 時 平成12年 1月22日(土)10:00～17:00

場 所 京大会館（京都市左京区吉田河原町15-9）

### プログラム

10:00～10:10 開会挨拶 再生医科学研究所長 山岡 義生

#### トピック 1 分化・増殖制御による有用細胞の産生

10:10～10:40 ES細胞と生殖系列細胞の発生分化と再生医学 再生医科学研究所教授 中辻 憲夫

10:40～11:10 試験管内神経分化系の再生医学的展望 再生医科学研究所教授 笹井 芳樹

11:10～12:10 特別講演

核の分化全能性の誘導によるクローン動物の作出 近畿大学農学部教授 角田 幸雄

12:10～13:20 休憩

13:20～14:20 特別講演

発生学と再生医学 行程と工程 医学研究科教授 西川 伸一

14:20～14:50 休憩

#### トピック 2 組織・臓器レベルでの再生研究フロンティア

14:50～15:20 肝細胞増殖因子（HGF）遺伝子を用いた血管新生

大阪大学大学院医学系研究科助教授 森下 竜一

15:20～15:50 Cartilage Repair（軟骨の修復） 再生医科学研究所教授 岡 正典

15:50～16:20 生体内における自己組織・自己臓器の再生誘導 再生医科学研究所教授 清水 慶彦

16:20～16:50 スーパーバイオミメティックスとしての肝臓組織工学

東京工業大学大学院生命理工学研究科教授 赤池 敏宏

16:50～17:00 閉会挨拶 再生医科学研究所教授 永田 和宏

参加費 無料（申込不要）

問い合わせ先 再生医科学研究所・永田和宏（TEL 751-3848 FAX 751-4645）